

B.R.I.O

ブリオ



特集

趣味を語れる セカンドウォッチが欲しい

鼎談 2007年注目のセカンド腕時計にどれか／実例、自分らしいを突き詰めればこの時計

横浜・神戸 中華街は「大人のテーマパーク」だ

“音楽の都”パリを歩く

新連載 ブランドと週末 サルヴァトーレ フェラガモ

第2特集

ホームシアターに贅は極まる

3
2007

ホームシアターは男の歴史も映し出す

求心力が欲しかったのだ。
無難なところとして、まず皆で楽しんだのは日本映画の新作。そして、少し変わったところではアンタッチャブルやザ・たつちといったお笑いのDVDを選んだ。なぜ、わざわざホームシアターで？ と笑われるかもしれないが、今やこれだけは大画面でなければならない。なぜならお笑いは、ある意味で時代を切り取る作業だと思うからだ。切り取られた時代を感じ取るため絶対に必要なのは、舞台上の空気。小さな画面のテレビでは、その空気感が十分伝わってこないのである。

そんな大画面の臨場感で、家族をリビングに集合させるることに成功した僕たちは、実はもうひとつの楽しみがある。それは、少し大袈裟に言うなら「自分」をホームシアターで再確認するい

‘50、‘60年代は日本映画の全盛期、テレビはまだメディアの主流ではなく、コンピュータゲームももちろん存在しないこの時代、才能あるクリエイターは映画産業に集中していた。‘50年代には小津安二郎や黒澤明が代表作を撮り、‘60年代に入ると、今村昌平、大島渚、市川崑、篠田正浩といったその後日本映画を担う才能が作品を作り始めている。そんな中で、僕が大好きなのは川島雄三。大学時代まで京都に住んでいた僕は、本当に観たい映画を観るためにわざわざ大阪まで足を運び、上映館を探し歩かなければならぬことも多かつた。その後東京に来て、「なんて楽に映画が観られるんだろう」と感激した。そして今、「川島作品展館上映」が、夜ごと我がリビングで行われていることを思うと、なんだか隔世の感がある。

た。最近になつてまた、しばらく埃をかぶつていたそのビデオを引っ張り出しど、グラス片手に、自分の記憶が間違つていたシーンをメモしながら観賞していく。そのメモが役に立つことはあまりない。「ああ、この試合はラウンドKOだったか」とぶつぶつ言いながら、「5ラウンド」とメモに書く。ただそれだけで終わつてしまつことがほとんどだが、癖というかなんというからラックスできるのである。もちろんたまには仕事のアイデアや会話のネタが生まれることもある。

そして'80年代は、僕自身が日本の音楽シーンに直接関わつていた時期だ。ローザ・ルクセンブルグのどんとが大学の2年後輩で入つて来て、後に彼とBOGUMBOSSを組むKyonは2つ上ぐらにいた。けつたいな連中に囲まれながら僕は、自分でギターべースを弾きながら、少年ナインのディレクションをしたりもしていた。この年代、世界的にロックは行き詰つて

ひたすらに前だけを向いて進んできた
20代、30代を過ぎ、少し立ち止まつて
これまでの自分を振り返つてみる。僕
だけの話でなく、そもそも男にとって
の40代とは、そんな時期なのかもしれない
。それは単なる懐古趣味とは違つ
て、ネジを巻き直したり、次のジャン
プに備えてバネを押さえることなのだ
と思う。十分にネジを巻いて自分自身
を充実させたら、また新しい世界が見
えてくるのではないだろうか。
かくいう僕も最近になつて、仲間と再
びバンドを組むことに決めた。来るべ
きもうひとつのお楽しみは、メンバーた
ちがそれぞれの趣味を持ち寄つて、我
が家のホームシアターの前に集うこと
である。

多忙期を過ぎ、ここ数年、多少は自分のペースで仕事ができるようになつた。気がつくと、二人の子供は中学生家族それが一人の時間を楽しむつうになつっていた。それはそれで大切かな

「70年代のボクシング」「80年代の意味」という3つ。ある時期に自分の興味の大半を支配していた趣味の世界に、あらためてどっぷり浸かってみようといふわけだ。

田国明、大場政夫、輪島功一、ガツツ
石松が世界のベルトを巻いた。この時
代のボクシングマニアだった僕は、若
い頃、給料の半分近くを突っ込んで手
に入るだけの試合のビデオを集めてい

ストレートに、ロックをやつていた。それは今観ても、とても氣持ちのいい姿だ。マイナーな時代の客席に数人しかいないような彼のライブ映像は、僕に何かを思い出させてくれる。

中村伊知哉

さうしてどうの楽しみは、ソンハーナたちがそれぞれの趣味を持ち寄つて、我が家のホームシアターの前に集うことである。

を充実させたら、また新しい世界が見えてくるのではないか。

の40代とは、そんな時期なのかもしれない。それは単なる懐古趣味とは違つて、ネジを巻き直したり、次のジャンプに備えてバネを押さえることなのだ。

に何かを思い出させてくれる。
ひたすらに前だけを向いて進んできた
20代、30代を過ぎ、少々立ち止まって
これまでの自分を振り返ってみる。僕

な中、どんとは奇をてらわず、正直にストレートに、ロックをやつていた。それは今観ても、とても気持ちのいい姿だ。マイナーな時代の客席に数人し